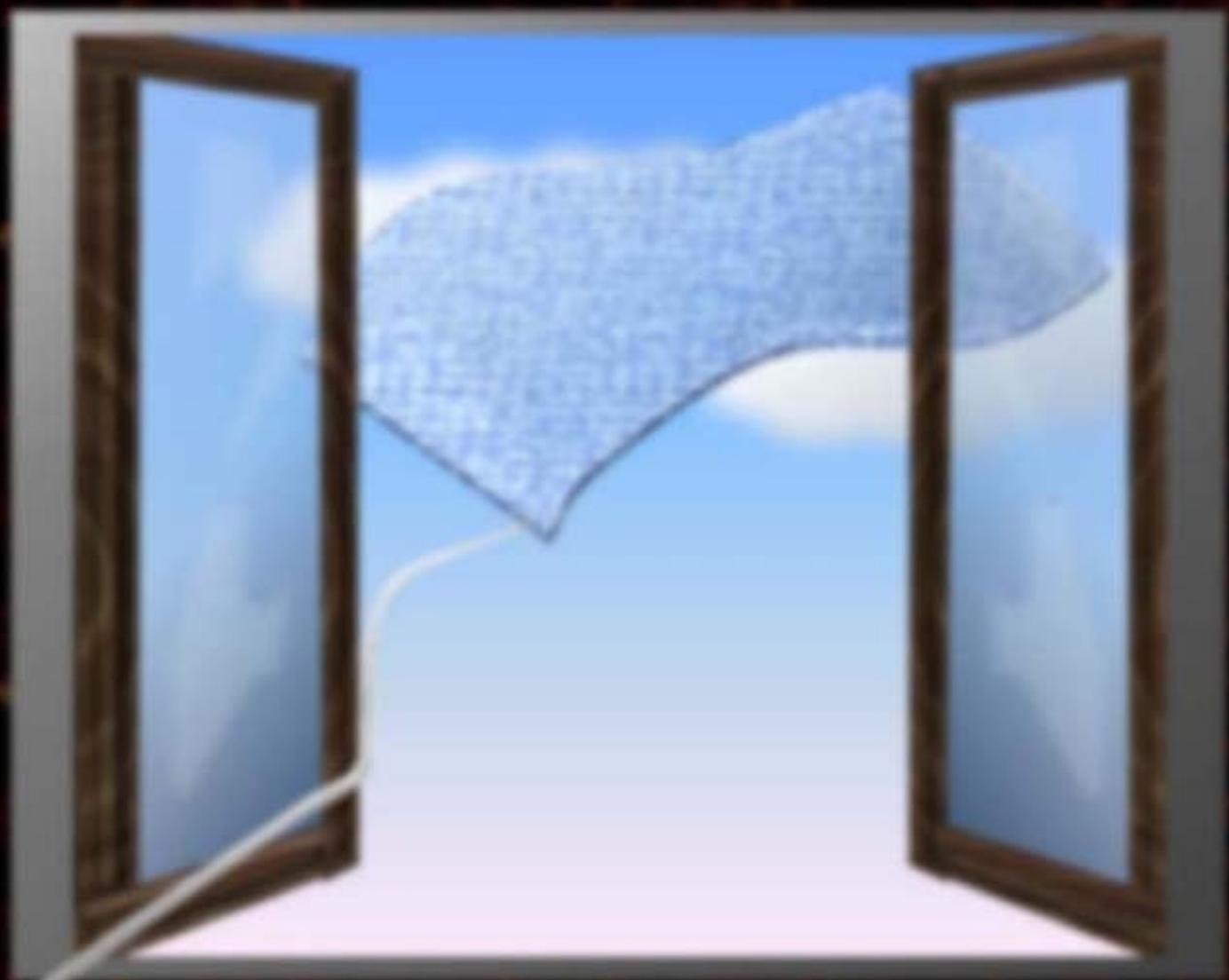


週刊 **夢の窓** No.14



むうにい

## 真夜中の公園

昼のうち降った雨がまだ引かず、町中、どこもかしこも水浸しだ。歩道ですら、人のくるぶしまで溢れている。

おろしたてのレイン・ブーツを履いて、わたしは近くの公園まで行ってみた。

深夜の公園は人気もなく、ときおり吹く風に煽られ、枝葉のこすれる音だけが聞こえてくる。

碁盤の目のように作られた遊歩道を、行く先も決めずに歩く。ざぶざぶと水をかき分けて進むのは心地よい。真っ黒い水が、水銀燈の光を受けて、ぬらぬらと揺らめく。

屈んで、手を水に浸してみる。冷たくて、とても気持ちがいい。水をかくと、縁石に向かって波が走っていく。それが楽しくて、何度も繰り返しては遊ぶ。

波の行く末を目で追っていくと、檻が置かれているのに気づいた。小さな檻で、中にはネコが1匹、身じろぎもせずしゃがみ込んでいる。「なんで、こんなところに」わたしは檻に近づいた。

ネコはじっとこちらを見つめている。生気のない虚ろな目だった。かすかに震えていなければ、置物と間違えてしまいそう。

外に出してやろうと出入り口を探すが、どこにも見つからない。

檻はここだけではなかった。辺りを見渡すと、あっちにもこっちにも、大小、様々置かれている。

リスの入った小さなもの、ウシやウマなどの檻、果てはゾウ、キリンまでもが打ち捨てられていた。

わたしは1つ1つを見て回る。どの動物も、おびえて悲しそうな様子だった。近づくとわたしの顔を、ただ見つめるだけで、ぴくりとも動かない。どの檻にも出入り口はなかった。

「かわいそうに。誰がなぜ、動物たちを閉じこめているんだろう」悲しみが、わたしの心へと直接伝わってくる。

遠くからクルマの音が聞こえてきた。わたしはとっさに、木の陰へと身をひそめる。

白いバンが、そう離れてもいない場所までやって来て停まる。中から黒いスーツを着た男が降りてきた。開いたドアから射し込む街灯の明かりが、車内を照らす。

頭のとっぺんから爪先まで、派手な服を着た中年の女性が、後部座席にだらしなくもたれ掛かっていた。帽子にはクジャクの羽、コートは銀ギツネの毛皮製だった。

「早いところ、すませておくれ」女が言った。

「はい……」男は答えると、バックドアを開けて黒っぽい塊をつまみ出し、歩道脇にぽいと放り捨てる。

ぐったりと力つきたアルマジロだ。たちまち、その周囲には鉄の棒が突き出て、あっというまに檻が出来上がる。

これらの檻は、捨てられた動物たちの「墓標」だったのか、とわたしは悟った。

木の陰でその一部始終を眺め、あまりの理不尽さに涙がこぼれる。

バンが走り去ってしまうと、わたしは再びネコの檻に戻った。

「ごめんね、ごめんね。人間は勝手な生き物だね。でも、どうかあの人達を許してあげて。一番憐れなのは、人間の方なんだ。なぜって、自分がかawaiiそうだということに気づいてないんだもの」

泣きながら、わたしは檻に触れる。頑丈な鉄の棒は、光の粒子となって崩れ消える。

ネコは一声「ミャウ」と鳴くと、どんどん薄くなって、やがて夜の闇に溶けていった。

## おくのうら道

防衛省が秘密裏に「水・爆弾」を開発した。炸裂すると、周囲数百キロ四方が湿度100%になってしまうのだ。

ただでさえ鬱陶しいこの梅雨時に、考えただけでもゾッとする恐ろしい兵器である。ところが、こっそり造ったはずのこの爆弾、さっそく盗まれてしまった。

部屋の片隅で、電話が鳴り響く。

「はい、もしもし……」

「ああ、むうにい君かね？」ずいぶんと威張りくさった声だ。

「ええ、そうですけど。どちら様ですか？」

「わし、防衛大臣。で、君に捜査の協力を依頼したいの。ほら、テレビでも話題になってる、例のみ・ず・ば・く・だ・ん」

「はい？」何かの冗談だろうか。

「とにかく、すぐ来てちょ。最寄りのこ・う・ば・んっ」

それだけ言うと、いきなり切れた。

わけがわからないまま、わたしは交番へと駆けつける。

「あのう、先ほど電話をもらった者ですが」わたしが告げると、巡査が恐縮したように、奥の部屋へと案内してくれた。

男がちゃぶ台の前で、あぐらをかいて茶をすすっている。防衛大臣らしい。

「来たね、来たね。さっそくだけど、渋谷ハチ公前に行って、松尾芭蕉と合流してくんない？」

「松尾芭蕉って……」わたしは絶句した。

「うん、この件にはね、野牛一族が絡んでいるらしいのよ。ほら、君も知っての通り、人類はサルのほか、ウシからも進化したでしょ」

「初耳です、そんな話」わたしは正直に答えた。

「いや、そうなのよ。ウシから進化したのもいるんだ。ほんとだって」

「わかりました、そういうことにしときますから、先を続けて下さい」

防衛大臣の話のを要約するところだ。

ウシは乳牛、肉牛、そして牛人間の3通りに進化したという。牛人間達は何かにつけ、サルから進化した人類を目の敵にし、事あるごとに嫌がらせを続けてきた。

そんな連中をギャフンと言わせたのが、かの松尾芭蕉だという。牛の蹄は2本に分かれているので、奇数が数えられない。俳句のリズムは5・7・5だから、句を詠む以前に大敗してしまったのだ。

「それで、芭蕉なんですね」わたしは合点がいった。「まあ、人間は牛肉を食べたりもしますし、恨まれても当然かもしれませんが」

「ん？ 連中、ステーキとか大好きだよ。特に松阪牛の霜降りなぞ、目がないんだぞ」

なんて節操のない。

「でも、なんでこのわたしが同伴するんでしょうか。何一つ役に立たないと思いますよ」不思議に思って聞いてみた。

「だってだって、ほら。君、小学校の作文で、芭蕉の俳句が大好きだって書いてたじゃないの」

「えっ……」昔の、しかもそんなどうでもいい理由で起用するって、いったいこの人は。

渋谷駅・ハチ公前で立っていると、ぽんっと肩を叩かれる。振り返ると、180センチは軽く越えている、70ほどの男がニコニコと見下ろしていた。

「待たせましたかな。わしが松尾芭蕉ですじゃ」

想像していたのとはまるで違う。グレーのスーツをピシッと着こなし、まるで英国紳士のようだ。

「あ、初めまして、芭蕉さん。むうにいと申します」わたしはかしこまってあいさつをする。

「わしのことは松っちゃん、とでも呼んでおくれ。そのほうが気が楽でな」

「は、はい……。じゃ、松っちゃん。道中、よろしくお願ひします」

「うむ、こちらこそ」

野牛は「おくのほそ道・バイパス」を日光へ向かって進んでいるらしい。

「わしらは、その先手を行かねばなるまい。『おくのうら道』じゃよ」芭蕉、いや松っちゃんは言った。「半日もせんうちに、きやつめと相まみえることじゃろうて」

「おくのうら道」は、住宅街の軒と軒の隙間や、時には庭を突っ切った最短ルートだった。おかげで、わたしは何度となくどぶ板を踏み抜いたり、飼い犬に吠えられたりした。

いっぽう、松っちゃんとはいえば、その程度のハプニングなど、意にも介してないらしかった。

松っちゃんの言葉通り、その日の夜遅く、とあるうら寂しい街道で、野牛に追いついた。

「もう、逃げられはせんぞ、野牛め。さ、潔く観念して、『水・爆弾』を渡してもらおうか」池のほと

りで、松ちゃんが呼ばわった。

「おのれ、芭蕉。わが一族の恨み、今宵こそ晴らしてくれようぞっ！」野牛は、片方の足で土をかき始めた。マタドールに突進しようとする闘牛のようだ。

ダッと駆け出したかと思うと、軽々と数メートルを跳ね、強烈な足蹴りを繰り返す。

松っちゃんは、紙一重で身を翻すと、あっという間に背後を取り、野牛の懐から「水・爆弾」を奪い返した上、さらに回し蹴りまで見舞う。

「ゲエッ！」野牛は叫び声とともに池に落ち、二度と上がって来なかった。

「一句、浮かびましたぞ」スーツのしわをはたきながら、松っちゃんが言う。「古池や かわす跳び蹴り 水の音」

## 紙飛行機、遙かな星を目指す

アレルギー性鼻炎に苦しむわたしを見かねて、主治医が宇宙研究所を紹介してくれた。  
「宇宙を知ると、この鼻炎が治るんですか？」わたしの頭の中はハテナマークでいっぱいだ。  
「いや、そうじゃないんです」主治医は理由を説明する。「最近の天文学によってもたらされた情報によれば、遙か4.3光年の彼方、アルファ・ケンタウルスの3つ隣に、ベータ・カロチンという惑星が見つかったと言うんですな」  
「なんだか、体に良さそうな星ですね」  
「そこでは、ただで健康な体をもらえるらしい。鼻炎どころか、慢性冷え性も一気に解消できる、そう期待してるんですがね」

わたしは、大喜びで宇宙研究所へと出掛けていった。  
中目黒の一画、築40年は経っていきそうな古いビルの5階に、その宇宙研究所があった。  
ドアをノックすると、中から「どうぞ〜」とのんきな声が返ってくる。わたしは部屋へと入った。  
「やあ、君かい、ベータ・カロチン星へ行きたいっていうのは？」50過ぎの、いかにも実直そうな男が尋ねる。  
「あ、はい。よろしくをお願いします」わたしはぺこりと頭を下げた。  
「うん、じゃあ、こっちへ来て」そう言うと、別室に案内される。  
さぞや、設備が整っているんだろうなと思いきや、がらんとした6畳くらいの部屋だった。窓は厚いカーテンで覆われ、一部が四角く切り取られている。手前の台には、人が1人やっと乗れるほどの紙飛行機が載せられていた。

「あの飛行機に乗ってね」博士が促す。  
「えっと、ロケットじゃないんですか？」とわたし。いくら4.3光年が宇宙規模でご近所だと言っても、これじゃ無理だと思う。  
「あいにく、地球上にそんな高性能なロケットはないんだ。でも、安心したまえ。惑星に行く方法はほかにある」  
「そうなんですか」  
「そら、カーテンの隙間から日が差しているだろう？」博士が指差した。白い筋が真っ直ぐ伸びている。その中を無数のホコリが舞っていた。「そのホコリこそが、われわれの銀河なのだ」  
わたしはじいっとホコリを見つめた。これが銀河だって？

「君の乗った紙飛行機は、ダスト・シュートのごとく、その窓に空いた穴から滑り落ちていく。すると、空気抵抗による圧縮で、どんどん縮んでいくのだ。やがて、ホコリよりも小さくなって、ついには『ホコリの宇宙』へとたどり着く、とまあ、こんな原理なんだ」  
まったく理解できなかったが、それがつまり、最新科学というものなのだろう。  
「向こうに着いたら、どうすればいいんですか？」紙飛行機にまたがりながら聞く。  
「座標が正しければ、薬局の前に降りるはずだ。そこで、この処方箋を見せなさい」  
「わかりました」わたしは処方箋を受け取った。

「じゃあ、押すよっ」後ろから博士が声を掛ける。  
「あ、はい！」わたしは紙飛行機に、しっかりとしがみついた。  
ドンッと背中を押され、紙飛行機ごと、窓の外に突き出したシューターに落ちていく。真っ暗なトンネルの中、息もできないほどのスピードだ。  
けれど、博士の言った通り、どうやらわたしと紙飛行機は縮んでいるらしかった。そうでなければ、たかだか5階の高さである。とっくの昔に地面に激突しているはずだ。

やがて、ちらちらと光の粒が見え始めてきた。呼吸が楽になったことから、すでに「ホコリの宇宙」へと入ったと思われる。  
光は次第に明るくなり、銀河や恒星を形作っていく。  
「ここは『ホコリの宇宙』でもあり、自分の住む銀河でもあるんだ……」こうして体験してみると、博士の言葉がよくわかった。  
眼前に黄色い惑星が見えてくる。ベータ・カロチン星に違いない。

大気圏に突入する際も、所詮は紙飛行機、大した抵抗はなく、滑らかに降りていく。  
ふわりと着地したのは、「カボチャ薬局」と書かれた店の前だった。  
「ここでいいんだよね」自分にそう言いながら、処方箋を握って入店する。  
「いらっしやいませ」頭にカボチャを載せた店員があいさつをする。この星の住人は、どうやらカボチャ人間らしい。  
わたしは処方箋を渡した。  
「あの、地球から来た者ですが」  
「ああ、ただで健康な体を手に入れるためにいらしたんですね」面と向かって言われると、自分が厚か

ましい人間に思えてくる。

店員は、棚から健康ドリンクっぽいビンを下ろし、わたしに差し出した。  
「こちらがその薬です。今、ここで飲みになりますか？」  
「はい、そうします」わたしは答えた。キャップを開け、グビッと飲み干す。  
オロナインの風味に、メンソレータムのさわやかな香りが、口いっぱい広がる。  
「どうですか。持病の天然ぼけは治まりましたか？」店員はにこにこしながら尋ねた。  
「それはどうにもなりません、どうやら鼻炎は治ったようです。冷え性もよくなったんじゃないかと」  
「それは良かったですね」  
「ありがとうございました」わたしは礼を言った。

さて、帰りはどうするんだろう。聞いておくのを忘れていた。  
わたしが困っていると、カボチャ頭の店員が外に出てきて、  
「帰還の手伝いをするよう、あちらから連絡を受けていますから」  
一緒に紙飛行機を担ぎながら、薬局の5階を目指して、階段を上っていく。  
「もしかして、また5階の窓から滑り降りるんですか？」とわたし。  
「ええ、この星にだって、そんな夢のようなロケットなどありませんからね」店員は当然のように答えるのだった。

## 紫の壺

「こんなものしかないけど」カップ入りケーキとサイダーを持って、部屋に戻る。桑田はクッションの上であぐらをかいたまま、部屋の隅っこをじっと見つめていた。  
テーブルにケーキとグラスを置くと、わたしはその向かいに座る。

「なあ、むうにい」桑田は顔をあちらに向けたまま、ぼそつと言う。  
「うん？」  
「あの変な壺、前からあったっけ？」  
桑田が顎で示した場所を見るが、何もない。  
「どの壺？」  
「どれって……。角に置いてある、あれだよ。紫色をした、おかしい形の」  
「何もないじゃん」わたしには何も見えなかった。「また、騙そうとしてる？」  
「お前、ほんとに見えてないのか？」桑田は立ち上がり、壁のそばに寄る。「ほら、ちゃんと触れるし、確かに存在してるぜ」

わたしも桑田のところへと行き、試しに手を伸ばしてみる。けれど、空をつかむばかりだった。  
「もう、いい加減にからかうのはやめない？ 何もないじゃん」わたしは少し腹が立ってきた。  
「ほんとだって、あるんだって」桑田には珍しく、真顔で言い返してくる。  
「でも、見えないんだけど。触れもしないし」  
「叩いてみるな」桑田はグーで、何もない場所を叩く真似をした。  
クワン、クワン、と奇妙な音が響く。  
「えっ、どうして？」わたしはぞくぞくと寒気を覚えた。  
「なっ？」これでわかったろ、と言いつつ、桑田もまた気味悪そうな表情を浮かべていた。

「どんな形の壺なの、それって」わたしは聞いた。  
桑田はうーん、と考え込んでしまう。壺をなで回したり、持ち上げて底を見る格好をするのだが、そこまでしても、説明に足る情報を得られないようだ。  
「紫色ってことは話せるんだ」桑田は考え考え、伝えようとする。「でもよ、形がどうもはっきりしない。一輪挿しのようだが、ヤカンのようにも見えるし……」  
「何それ。全然、違うじゃん」わたしは呆れた。  
「そうそう、もう1つ確かなことがあった。口と底とがつながっていて、ループになってるな。水は入れられるが、出すところがない」

桑田の説明を聞いていたら、ますます訳がわからなくなってきた。  
「携帯で写真とか撮れない？」思いついて、そう提案してみる。  
「そうか。やってみよう」桑田は携帯を取り出すと、パシャッとシャッターを押す。「どれどれ……。なんだこりゃ？」  
わたしは撮った映像を見せてもらった。  
紫色をした無数の影が、重なり合うようにして写っている。人の行き来する交差点を、多重露出にでもしたようだ。

わたしの部屋にあると言う「紫の壺」は、ついにこの目で見ることもなかった。見えていないだけで、まだそこにあるのかもしれない。  
そう思うと、何となく落ち着かない気持ちになる。

ある時、桑田に呼ばれて、家に遊びに行った。  
華道を嗜む彼の母の見立てだろうか。玄関のラックには、紫色の壺がさりげなく置かれていた。  
「ようっ、上がれよ」桑田が廊下の奥から手招きをする。  
「ねえ、桑田。この壺、ちょっと風変わりだけど、やっぱり生け花用？」  
「へっ？」  
「だから、このラックの上の紫の壺」わたしは指差した。  
「どれ？ 何もねえけど？」  
口と底がつながったその壺は、どうやらわたしにしか見えていないようだ。

## 山の上の博物館

えっちら、おっちら山を登っていくと、林の向こうにレンガ色をした大きな建物が見えてきた。「あれが山ノ上博物館か」わたしは、独りつぶやく。世界でただ1頭しか見つからない、プラチナサウルスの骨格標本を見に、はるばるとやって来たのだ。

近年、白樺湖の湖畔で発掘されたこの恐竜の骨は、まるで白金でできているかのように光り輝いていたという。

その後、近辺から次々と他の部位が見つかり、完全な形で復元されるに至った。鼻先から尾まで、全長17メートル。アパトサウルスに似た、大型の草食恐竜である。

自動販売機で入場券を買い、入り口のスタッフに手渡す。

入ってすぐの広場には、チープな作りのステゴサウルスやT・レックスのレプリカが置かれ、わたしを出迎えてくれていた。

なんだか、安っぽいテーマ・パークにでも来たような気がしてくる。

館内に入ると、学芸員がイスから立ちあがり、会釈をした。

「まずは、特設会場のほうからご覧下さい」

「そこは何を展示しているんですか？」わたしは尋ねる。

「はい。昭和時代、この辺りで実際に走っていた乗り物や、使われていた家電製品など、いわゆるレトロを主題に置いた会場となっております」

「ちょっと面白そうですね」わたしは興味を覚えた。

恐竜はとりあえず後回しにして、まずは特設会場から観ることにする。

乗り物を展示するだけあって、かなりスペースを広く取ってある。トロリー・バスというのだろうか、屋根からパンタグラフが突き出たバスが置いてあった。

「ご自由に中をご覧下さい」と案内が掲げられている。後ろの扉が入りやすそうだったので、そちらのステップに足を乗せたところ、運転席から注意する声が出た。

「前のめり、後ろ蹴りだよ」

「えっ、なんですか？」びっくりして聞き返すと、少し照れたような口調で、こう言い直す。

「前乗り、後ろ降りです……よ」

わたしは前の扉から入り直した。運転席には、当時の運転手が剥製となって、座り続けている。

言語能力は失っていないのだが、脳みその代わりにおがくずである。時々、とんちんかん言葉が飛び出るらしい。

「剥製になっても、給料とか、ちゃんともらえるんですか？」失礼かと思ったが、聞いてみた。

「ええ、安いですけど。まあ、好きでやってるし、第一、金の使い道があるわけなし」運転手は前を向いたまま、そう答える。

家電のエリアには、電気タンスがあった。NHKアーカイブでは見たことがあるが、実物はやはり迫力がある。衣類の持つ電氣的抵抗や容量を還元し、虚数宇宙との通信を可能にする……だったかな。当時は、どの家にも1台はあったそうだ。

一通り見て歩き、ふと柱のガラス時計に目をやると、もう2時間も経っている。

ガラス時計は、砂の代わりに粘性の比較的低いガラスが封じ込められている。それが、ゆっくり、ゆっくりしたたり落ち、時を正確に刻んでいるのだ。

「あ、そろそろプラチナサウルスを観に行かなくちゃ」わたしは特設会場脇の階段を上っていく。

2階は太古の生物をテーマにしていた。

原始的な生物や、巨大な昆虫、見慣れない奇妙な植物、恐竜、そんなもの達だ。

当時はなんでも、とにかく巨大だったらしい。ワラジムシやゾウリムシの化石など、まるでスリッパにしか見えない。

ゴキブリの仲間もすでに存在していたけれど、丸めた新聞紙で叩こうなどとはとても思いつかない。何しろ、背に人を乗せて歩けるほどのだから。

お目当てのプラチナサウルスは、堂々と中央にそびえていた。

「うわあ、さすがに大きい……」見上げるばかりでなく、目を細めなくてはならなかった。どこもかしこも磨き上げたような銀色をしている。天井からの照明が無数に反射し、とてもまぶしい。

「どうです、この染み1つない輝き。美しいでしょう？」プラチナサウルス専門の学芸員だろうか。まるで、自分のことのように誇らしげに話す。

「ええ、まるで、本物のプラチナのようですね」わたしが感嘆すると、

「いえいえ。仮に本物のプラチナでこれだけのものを作ったとしても、価値は遙かにおよびません」と、笑いながら首を振るのだった。「プラチナなら、世界中からかき集めることもできますが、なんてったって、あなた。このプラチナサウルスは、世界でこれ1頭きりなんですから」

## 電車、電車、電車

---

黄色い電車の上りに乗らなくてはならなかった。

「ホームは反対側か。ちょっと、遠いなあ」わたしはつぶやく。「しかたがない、電車で行くか」踏切脇の自販機で、「反対ホーム行き」の切符を買い、電車を待った。しばらくすると、茶色い3両編成の電車がやって来る。「ホームのこっち側～、ホームのこっち側～。お降りの際は、お足元にお気をつけ下さい～」わたしは茶色の電車に乗った。

プッシュー、と音を立ててドアが閉まる。茶色い電車は、ガタン、ゴトンと揺れながら、線路を横切っていく。その間、本線に入ってきた黄色い電車は、停止して待っていた。反対側の踏切に到着すると、茶色い電車はレールを軋ませながら、ゆっくりと停まる。わたしは車掌に切符を渡して、茶色い電車を降りた。

上り電車の切符を買い直すと、ホームで待機している黄色い電車に急いで飛び乗る。黄色い電車は、線路を遮る茶色い電車が移動するのを見はからって、動きだした。「上り行き～、上り行き～」車内にアナウンスが流れる。「お急ぎの方は、このまま『急行』にご乗車ください～」電車の中には線路が敷かれていて、そこへ青い急行がやって来る。「あ、おれ急ぐから、乗って行こうかな」乗客の1人がそう言い、急行料金を追加で支払って、乗り込んだ。それに続くようにして、他の客もどんどん乗車していく。

あらかたの客が青い急行に移ってしまったのを見て、わたしは何だか心細くなった。急いでいたわけでもないけれど、後に続く。青い急行はすぐに出発し、たちまち外側の黄色い電車が景色となって流れていく。座席も、吊革も、天井から下がった広告も。さらに外側の風景も、まるで飛ぶような勢いで過ぎ去る。急行というだけあって、確かに早い。

再び、アナウンスが始まる。「もっとお急ぎのお客様は、間もなく到着の『特急』にお乗り換え願います……」青い急行も、通路の中ほどに線路が設けられていた。案内の通り、ずっと後ろの車両から別の電車の走ってくる音が聞こえてくる。「特急」だ。今度は白い電車である。

「そうそう、今日のもっともっと急いでたんだっけ。乗らなくちゃ」また、客達がぞろぞろと乗り換えていく。わたしも不安になって、みんなと一緒に「特急」へ乗り込んだ。

## 天気予定局でバイトする

友人の桑田孝夫とは、旅先の沖縄でいったん別れる。それぞれ、船で行きたい島へと渡ることにした。

南方の海に浮かぶミヤーク島に遊びに行った際、現地のシャーマンにアルバイトをしないかと誘われる。

「どこの寒村もそうじゃろうがな」年老いたシャーマンは語った。「ここミヤーク島でも、年々人が減っておってな。特に、若い衆など、都会になんぞ懂れて、どんどん島を出ていきおる。おかげで、働き手が足らんでのう」

「はあ、それはお困りでしょうね」わたしは心から気の毒に思う。

「おまいさん、どうじゃ、ちっとこの島でバイトなどしていかんか？」

「ええ、短期ならかまいませんけど」

「助かるわい。じゃあ、さっそく手伝ってもらおうとしようかのう」ほっとした顔でうなずくと、わたしについてくるよう言った。

ジャングルを分け入って、島のほぼ中央へとやって来る。東京ドームほどの広い敷地に、煙突のような物が4、50本ばかりそびえていた。ざっと目星をつけても、300メートルほどの高さがある。

「なんですか、この塔は？」わたしは見上げながら聞いた。

「ここは天気予定局じゃよ」シャーマンが答えた。「これらの筒は、様々な天気を操るための制御棒じゃ」

「天気って、この島で操作してるんですか？」

「さよう。例えば、あの筒は雨を、向こうのは雷、そしてこっちのは風、という具合にな」

わたしは風の筒に近づいて、よく眺めてみた。大人が3人輪になれば、ぐるっと囲んで手をつなげるほどの太さだ。

根元には大きなハンドルやレバー、いくつかのボタンが並んでいる。

「そのレバーを引くと、次第に風力が強くなる。ハンドルで、風の吹く向きを変えられるんじゃ」

「面白そうですね」なんだか興味が湧いてきた。

「おまいさんには、風と雨を操作してしてもらおうかの。わしの言う通りに動かせばええ。簡単なことじゃよ」

「はい、わかりました。任せてください」わたしは自信を持って請け負う。

シャーマンは、バインダーを開きながら、ぶつぶつとつぶやく。

「ふむふむ、ヨーロッパは曇りのち雨、アメリカは晴れときどき曇り、アフリカは今日も雲ひとつない快晴、ただし、西からの強風……」

「それって、天気の詳細表ですか？」

「そうじゃ。各国政府からの要請を元に、天気ダイヤを組んでおる。さて、おまいさん、準備はいいかな？ では、風の筒に行って、レバーを3.7の目盛りまで引き、ハンドルは2:50の方向に回しとくれ」

「りょーかいっ！」わたしは大きく返事をし、風の筒を操作した。上空で、ポーッと汽笛のような音が鳴り響く。

「次は雨じゃ。レバー1.7、ハンドル2:45！」

わたしは雨の筒へ駆けていった。

「アイアイサーッ！」上空にもくもくと雨雲が湧き、雨がザーッと降り出す。

その雨も、風に乗って北へと流されていく。夕方には沖縄へと到着し、明け方にも関東平野をしっとりと濡らすのだろう。

その雨風をもたらしたのがこのわたしだとは、よもや誰も気づくまい。なんだか、愉快になってくる。

「おまいさん、筋がええのう」シャーマンがねぎらいの言葉を掛けてくれた。「前に手伝ってもらった奴めは、ちいっともわしの話の間かんかった。おかげで、えらい目に遭うたわい」

わたしは器用な方ではなかったが、それ以上に使えないのがいたのか。

「へえー、何をしでかしたんですか？」

「レバーの加減も考えんと、目いっぱい引きおってな、動かさんでもええと言っとるのに、ハンドルを面舵いっぱい回しよる」憤懣やるかたない様子で吐き出す。「そのときこさえちまった台風は、それはもう、凄まじいもんだった。おまいさんも、ニュースで観たじゃろ。ほれ、一昨日のあれじゃ」

数年ぶりの大型台風とのことで、列島中が大騒ぎになっていたっけ。台風って、運転ミスで発生するものだったのか……。

「とんでもない奴ですね、そいつ。どんな顔か見てみたいもんです」とわたし。

「そうじゃなあ、ぼさぼさ頭をした、図体ばかり大きい男じゃ。見るからに間抜けそうな面をしておったがのう」

まさか、あいつかなあ。雨雲のように不安が広がってきた。

「なんて名前でした？」一応、伺ってみる。

「たしか、桑田とか言っとったのう」

週刊 夢の窓 No.14

<http://p.booklog.jp/book/88251>

著者 : mueny

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/mueny/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/88251>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/88251>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社ブクログ